

レジリエンス研究教育推進コンソーシアム第 25 回幹事会議事次第

- 1 日時：令和 5 年 12 月 11 日（月）9 時 00 分～10 時 00 分
- 2 場所：オンライン（Web 会議システム Zoom）
- 3 出席者：寶（会長）、甘利（副会長）、遠藤（副会長）、岡島、石濱
オブザーバー：林（東京海上日動）
陪席者：松室（防災科学技術研究所）、松本（〃）、倉谷（〃）、菊池（〃）、小松原（セコム）、
大貫（筑波大学）、増田（〃）、栗原（〃）、酒井（〃）、根本（〃）

（敬称略）

4 議事

I. レジリエンス研究教育推進コンソーシアムに係る事案

- (1) 令和 5 年度年間活動計画について 資料 1
- (2) 令和 6 年度年間活動計画（案）について 資料 2
- (3) 巨大災害研究会・R2EC 合同シンポジウム開催案について 資料 3-1～3-2
- (4) JST 共創の場形成支援プログラム本格型申請完了について
- (5) 大日本印刷株式会社の退会について
- (6) その他

II. 筑波大学リスク・レジリエンス工学学位プログラムに係る事案

- (1) R2EC リサーチ&キャリアラボ（仮称）開催案について 資料 4-1～4-2
- (2) 大学院教育改革フォーラム 2023 開催報告 資料 5-1～5-2
- (3) その他

（資料）

資料 1	令和 5 年度年間活動計画	p.3
資料 2	令和 6 年度年間活動計画（案）	p.4
資料 3-1	巨大災害研究会・R2EC 合同シンポジウム（案）	p.5
資料 3-2	【別紙】巨大災害研究会 設立趣意書	p.6-
資料 4-1	R2EC リサーチ&キャリアラボ（仮称）（案）	p.9
資料 4-2	【参考】令和 4 年度参画機関・筑波大学意見交換会 実施報告	p.10-
資料 5-1	大学院教育改革フォーラム 2023 リーフレット	p.12-
資料 5-2	大学院教育改革フォーラム 2023 「意見交換会」メモ	p.14-

令和5年度レジリエンス研究教育推進コンソーシアム年間活動計画

〔令和5年12月11日版〕

年月	総会・運営委員会	幹事会	シンポジウム・セミナー ・研究会等	リスク・レジリエンス工学 学位プログラム	【参考】 JST共創の場形成支援プログラム
令和5年 4月		第24回幹事会 4月26日（水）15:30～16:30 オンライン		オープンキャンパス 4月23日（日）10:30～16:00 筑波大学総合研究棟B 7・8階＋オンライン	
5月	第6回総会 5月22日（月）15:00～16:30 オンライン				・ 第3回拠点運営委員会 （5月24日） ・ 拠点ワークショップ ・ 瀬戸内町(5月27日)※北原 ・ 神戸市(6月10日)※中内 ・ 広島市坂町小屋浦地区(7月6日) ※酒井 ・ 神石高原町(7月27日)※延原 ・ 広島市消防局(7月4日・8月7日)※内山
6月		第25回幹事会（延期） 6月 日（ ）10:00～11:00 オンライン			
7月				7月実施 前期課程入試（推薦） 7月実施 後期課程入試（一般・社会人）	
8月				8月実施 前期課程入試（一般・社会人） 8月実施 後期課程入試（一般・社会人）	・ シンポジウム（R2ECと共同） ・ 第4回拠点運営委員会・報告会 ・ オンラインワークショップ（4回） ・ 本格型申請書作成
9月	第15回運営委員会・参画機関見学会 9月21日（木）14:00～17:00 NTT宇宙環境エネルギー研究所		シンポジウム（JST共創の場と共同） 9月10日（日）13:00～17:30		
10月					
11月					・ 本格型申請締切 11月15日正午
12月		第25回幹事会 12月11日（月）9:00～10:00 オンライン		大学院教育改革フォーラム 12月1日（金）・2日（土） つくば国際会議場	
令和6年 1月				1-2月実施 前期課程入試（一般・社会人） 1-2月実施 後期課程入試（一般・社会人）	・ 本格型ヒアリング審査 1月7日（日） or 8日（月祝）
2月					・ 審査結果公表（予定）
3月	第16回運営委員会・参画機関見学会 3月6日（水）13:00～15:30 NEC玉川事業場（神奈川県川崎市）	第26回幹事会 3月4日（月）12:30～13:00 筑波大学東京キャンパス文京校舎	シンポジウム（巨大災害研究会と合同） 3月4日（月）14:00～17:00 筑波大学東京キャンパス文京校舎		
			R2EC就職説明会（R2ECリサーチ&キャリアラボ：仮称） ⇒次年度に延期		

青字：新たに決定したもの

※総会・運営委員会未開催機関（令和5年12月11日現在）：東急プロパティマネジメント、東急総合研究所、東京海上日動火災保険、DRIジャパン、電力中央研究所、電子航法研究所、労働安全衛生総合研究所

- 主たる活動 -

- ◆R2EC就職説明会(R2ECリサーチ&キャリアラボ:仮称)(4月)
- ◆シンポジウム(2回)
 - ・R2EC単独シンポジウム(10月)
 - ・共同開催シンポジウム(2月)

- 会議 -

- ◆総会(1回)
 - ・第7回総会&参画機関見学会(5月)
- ◆運営委員会(2回)
 - ・第17回運営委員会&参画機関見学会(10月)
 - ・第18回運営委員会&参画機関見学会(3月)
- ◆幹事会(4回)
 - ・第27回幹事会(4月)
 - ・第28回幹事会(7月)
 - ・第29回幹事会(10月)
 - ・第30回幹事会(2月)

※総会・運営委員会未開催機関:

東急プロパティマネジメント、東急総合研究所、
東京海上日動火災保険、DRIジャパン、電力中央研究所、
電子航法研究所、労働安全衛生総合研究所

巨大災害研究会・レジリエンス研究教育推進コンソーシアム合同シンポジウム
「レジリエントな DX 社会をつくる（仮）」

- (1) 日時：2024 年 3 月 4 日（月）14 時～17 時
- (2) 形式：対面と Zoom ウェビナーのハイブリッド
- (3) 会場：筑波大学東京キャンパス文京校舎 134 室
- (4) プログラム（案）：
 - ・テーマ：レジリエントな DX 社会をつくる（仮）
 - ・講演 2～3 本（2 名×40 分程度、または 3 名×30 分程度）、パネルディスカッション（60 分程度）
 - 講演 1（巨大災害研究会側、永松先生 Gr）：「応急対応 DX」からガバナンスにアプローチする（仮）
 - 講演 2（レジリエンス研究教育推進コンソーシアム側）：テーマ・講演者未定
- (5) 今後のスケジュール
 - ～12 月下旬：プログラム・登壇者決定
 - ～1 月 19 日（金）：登壇者の情報（題目、顔写真、略歴）提出締切
 - ～1 月末：チラシ・申込 WEB ページ公開（申込受付開始～2/29 まで）

【備考】巨大災害研究会について（別紙参照）

設立趣意書

「巨大災害研究会 ～SR ガバナンスの実現～」

発起人： 兵庫県立大学 環境人間学部 教授 木村 玲欧
東京大学大学院 情報学環 教授 酒井 慎一
筑波大学 システム情報系 教授 遠藤 靖典
富山大学 都市デザイン学部 准教授 井ノ口 宗成

（背景）様々な災害が頻発化する近年では、南海トラフ地震、首都直下地震、千島海溝地震等の発生確率が高まりつつあり、さらには大規模噴火の発生が切迫する現状に直面しており、深刻な被害は不可避である。他方で、少子高齢化や人口減少により、社会のみならず自然環境までもが荒廃・脆弱化している。そのため、個別の能力向上や技術開発だけでは災害への脆弱化を止めることが出来ず、「社会や組織、個人のレジリエンス能力を継続的に向上させるためのガバナンス」の必要性が、これまで以上に高まっている。

（SR ガバナンスの必要性）東日本大震災をふりかえれば、伊勢湾台風以降に整備されてきた災害対応法制、阪神・淡路大震災以降に強化してきた災害対応体制では、十分に乗り越えることが出来ず、大規模な被害とその後の応急・復旧・復興に大きな課題を残した。来たるべき巨大災害を乗り越えるためには、社会・組織・個人のレジリエンス能力を継続的に向上させるためのガバナンスへと発展させ、国家としての災害対応体制と災害対応法制における総合的な社会の仕組み変革が急がれる。つまり、Sustainable Resilience（SR）を改めて見直し、新しいガバナンスとしての SR ガバナンスを事前対策・事後対応において早急に確立・浸透させなければならない。

（災害対応体制の課題）広域大規模災害においては、応援受援が前提となるものの、業務手順の標準化が十分でないために、資源を効果的かつ相互に運用できていない。また、災害対策本部運営手順が共通化されていないために、複数市町村・複数都道府県をまたいだ事案について国が十分な調整機能を果たせていない。また、応援自治体のみならず、様々な組織からの応援受援が活発化していながらも、支援調整機能の担い手育成とそのノウハウが不足しているために、円滑な協働対応ができていない。

（災害対応法制の課題）伊勢湾台風以降、応急期に関する法律の整備は進んできているが、巨大災害の特異性を理解した法適用については検討が不十分である。また、復興期においては、東日本大震災を事例とした様々な施策の検証は道半ばである。さらには、復興計画が復興事業の迅速化と同義として捉えられているため、当事者の意見が復興に十分に反映されているかは疑問である。

（災害対応体制・法制の検討）東日本大震災の教訓を受け、それぞれの課題解決は検討され、個別技術を磨くことは進んでいるものの、さらに個別課題の解決を進展させなければならないし、それらの課題や解決策を体系的に整理し、防災・減災知として利活用できる資源とするための検討の場が必要である。

（研究会の目的）「巨大災害研究会」では、「社会や組織、個人のレジリエンス能力を継続的に向上させるためのガバナンス」を科学的に解明し、体系的な枠組みを構築することで、新たな学問を確立することを目指す。

（研究会のスタンス）南海トラフ地震の発生は 2035±10 年と言われており、我々に残されている時間は最短でわずか数年しかない。本研究会では 3 年後をめどとし、「社会や組織、個人のレジリエンス能力を継続的に向上させるためのガバナンス」に必要な要件を明確化し、学の確立を目指した提言をとりまとめる。

研究会名：巨大災害研究会 ～SR ガバナンスの実現～

設立の経緯

これまで、災害対応を中心に議論を行ってきた3つの研究会を発展的に統合し、それらの議論を継続させながら、新たな減災知の創出をめざして、ここに新研究会を立ち上げる。

① 災害対応研究会→Joint Seminar 減災（共同代表：河田・林）

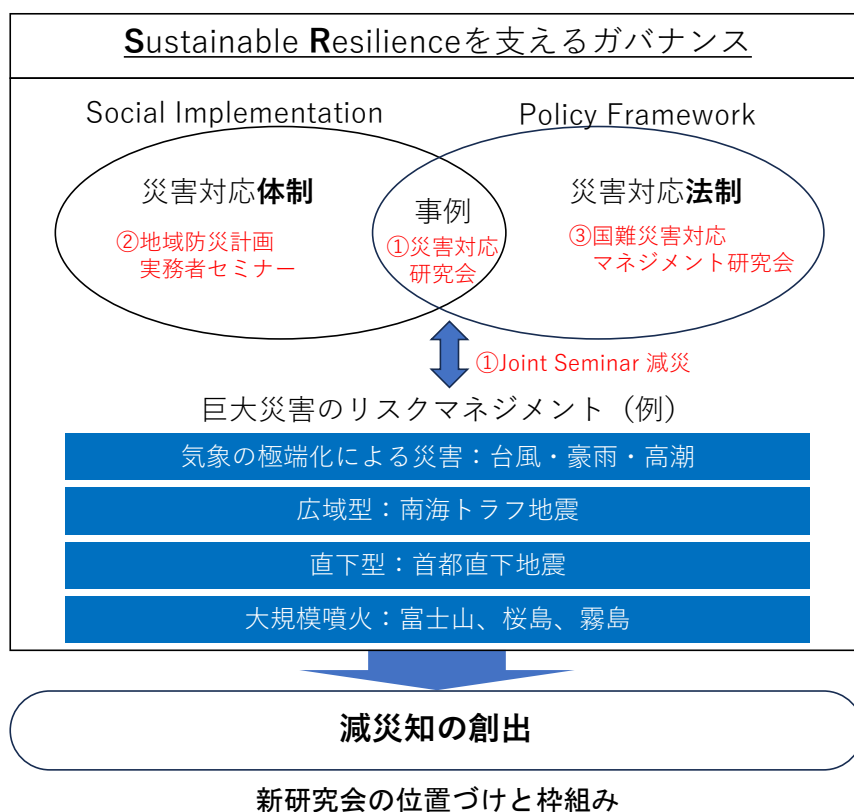
1995年阪神・淡路大震災直後の土木学会関西支部緊急対応分科会以降、災害対応研究会、Joint Seminar 減災と名称および一部体制を変更し、災害過程の体系的な理解の確立を目指して2023年で29年目を迎えた。

② 地域防災計画実務者セミナー（代表：林）

自治体の防災担当職員に対し、都市防災・地域防災についての理解を深め、京都大学防災研究所巨大災害研究センターを中心に、1995年阪神・淡路大震災発生以降に毎年開催し、2016年までに21回を開催した。

③ ICS推進研究会→国難災害対応マネジメント研究会（会長：武田、副会長：林）

ICS推進研究会では、産官学民で標準的な危機対応体制の構築をめざし、計26回の研究会を実施し、その後、国難災害対応マネジメント研究会と名称および一部体制を変更し、計13回の研究会を開催した。



研究会の進め方

1. 災害対応体制の標準化・共通化に向けた実装検討
2. 災害対応法制の体系整理と政策枠組みの検討
3. 巨大災害に潜在する特異事象の把握と対策検討
4. 体制と法制が融合したガバナンスの実現と減災知の創出
5. その他、必要と認められる事項

研究会の開催案

1. 時期：年2回（半年に1回）程度の開催を目途とする
2. 場所：首都圏・関西圏で交互に実施

研究会体制案

会 長：兵庫県立大学 環境人間学部 教授 木村 玲欧
副 会 長：東京大学大学院 情報学環 教授 酒井 慎一
筑波大学 システム情報系 教授 遠藤 靖典
幹 事：公益財団法人日本法制学会 理事長 澤野 次郎
新潟大学 危機管理本部 危機管理センター 教授 田村 圭子
事務局長：富山大学 都市デザイン学部 准教授 井ノ口 宗成
企 画：東北大学 災害科学国際研究所 准教授 佐藤 翔輔
防災科学技術研究所 災害過程研究部門 副部門長 鈴木 進吾
特別顧問：関西大学 特別任命教授 河田 恵昭
京都大学 名誉教授 林 春男
福島学院大学 副学長 武田 文男

*研究会の企画については、会長・副会長・事務局長・企画において議論する。必要に応じて、幹事及び特別顧問に意見を求める。

R2EC リサーチ&キャリアラボ（仮称）（案）

■開催趣旨

リスク・レジリエンス工学学位プログラムは、産学 16 機関が参加するレジリエンス研究教育推進コンソーシアム（R2EC）を運営母体とする協働大学院方式を採用している。

この機能を利点とした活動を今後さらに充実させる必要がある。その一つとして、昨年度は「ピッチ会」を実施したが、今年度はこの要素に加えて「優秀な人材の確保」を意図した「R2EC リサーチ&キャリアラボ（仮称）」を開催することとした。

■開催目的

- ・コンソーシアムと学位プログラム双方の活性化
- ・優秀な学生のリクルーティング
- ・学部卒・修士卒生の呼び戻し
- ・ルート構築&人材のサイクル化につながる

学部学生）R2EC リサーチ&キャリアラボ → インターンシップ → 就職 → 社会人学生

修士学生）R2EC リサーチ&キャリアラボ → 研究指導 → インターンシップ → 就職 → 社会人学生

博士学生）R2EC リサーチ&キャリアラボ → 研究指導 → 就職 → 協働大学院教員

■開催趣旨・目的から見えるメリット

参画機関側では：優秀な学生との出会いの場となり、容易に青田買いが可能となる

コンソーシアム活動が自機関で認知されるきっかけとなる

機関の課題解決に繋がる大学院進学（社会人）の増加と人材のレベルアップ

学生側では：職種、分野、待遇などがマッチングされることにより、やりたい研究が見つかり、結果、スムーズな就職にも繋がる

学位プログラム側では：サイクル化することによって自然に優秀な学生の獲得に繋がる

コンソーシアムとして：このような取組みを通じて活性化させることにより、コンソーシアムの本来の目的である社会貢献を共同研究や人材育成事業を通じて果たすことができる

■開催時期：2024 年 4 月予定

※筑波大学システム情報工学研究群オープンキャンパス（4/21(日)予定）と同日開催を検討

■開催場所：筑波大学内

■コンソーシアム参画機関への依頼事項

- ・「研究内容を紹介いただける方」「就職情報を紹介いただける方（人事担当者等）」の参加（3/6 の運営委員会にて説明・依頼予定）

令和4年度 参画機関・筑波大学意見交換会 実施報告

参考:第6回総会資料(R5.5.22)

〈機関一覧〉

	機関名	実施日時・場所
実施済	労働安全衛生総合研究所	令和4年6月2日(木) 16:00-17:00, オンライン
	大日本印刷株式会社	令和4年6月20日(月) 13:00-14:30, 大日本印刷
	NTT宇宙環境エネルギー研究所	令和4年6月23日(木) 14:30-15:30, オンライン
	日本電気株式会社	令和4年7月11日(月) 15:00-16:00, オンライン
	日本自動車研究所	令和4年7月21日(木) 10:00-11:30, 日本自動車研究所
	産業技術総合研究所	令和4年7月21日(木) 15:00-16:30, オンライン
	電子航法研究所	令和4年7月25日(月) 10:00-11:30, 電子航法研究所
	セコム株式会社	令和4年7月25日(月) 13:30-15:00, セコム
	電力中央研究所	令和4年8月1日(月) 15:30-16:30, オンライン
	防災科学技術研究所	令和4年9月8日(木) 10:30-12:00, 防災科学技術研究所
	NCDR	令和4年12月1日(木) 16:00-17:00, つくば駅
未実施	DRIジャパン	(調整予定)
	東急プロパティマネジメント株式会社	(調整予定)

令和4年度 参画機関・筑波大学意見交換会 実施報告

〈主なご意見〉

		これまでの活動に関するコメント	今後の課題
コンソーシアム関連	全体	- 話を広げるきっかけにはなっているが、具体的なテーマへの落とし込みが足りていないように感じる。「レジリエンス」の意味が分かりにくいのも課題。 - 取り扱うテーマが防災に寄っており、当機関としての出番があまりないと感じる。 - 当コンソーシアムに参画していることについて、社内での知名度がまだない。 - 授業や研究指導で筑波大学との交流も増え、当機関に就職してもらったりと、徐々に成果が出てきている。 - コンソのメリットは、共同研究、優秀な学生に興味を持ってもらって就職してもらおうということ。 - COVID-19以前は運営委員会後の見学会等で他機関との交流の機会があったが、最近は他機関の顔が見えにくくなった。 - コンソーシアムの活動のほとんどが学位プログラムのものであるため、2つの活動の区別が分かりにくい。 - 連携がピンポイント（筑波大の教員個人やその指導学生とのみ）のため、コンソーシアムや学位Pについて意見を述べられる立場にない。	- コンソーシアムとして取り組むべき問題点やテーマを設定するとよい。 - 各機関がなぜこのコンソーシアムに参加しているのかを、コンソーシアム内で説明する場を年1程度で設けてはどうか。 - コンソーシアムの活動内容・研究内容が分かる成果発表会のような場がほしい。対面だとおよい。 - 他機関との交流は時間やリソース的に難しい面もある。まずは筑波大学とのやりとりから、徐々に他機関との交流が生まれれば良いと考えている。 - 運営委員会後の見学会等を再開してはどうか。 - 学位プログラム以外のコンソーシアムの活動を広げるべき。
	共同研究	- 平場の議論から共同研究が生まれることは難しいかもしれないが、よいシーズや他機関からの相談があれば検討したい。ピッチ会も活用したい。 - アウトプットと資金等を考慮しなくてはいけないため、他機関との共同研究は難しくなっている。 「共創の場」のようにコンソーシアムの枠組みで外部予算を取りに行くことは大変良い取り組みだと思う。当機関の名前で参画することは難しくても、コンソーシアムとしての参画であれば支障ない。	- ピッチ会では対面で参加者が1対1で議論できる場があるとよい。 - コンソーシアム内で知財の取り扱いのテンプレートがあるとよい。 - 今後も外部予算獲得はぜひ進めてほしい。その際、コンソーシアムや各参画機関にどんなメリットがあるかを説明いただける場があるとよい。
学位プログラム関連	インターンシップ・就職	- インターンシップは人材確保の場として非常に重要な位置づけと捉えている。 - コンソーシアムを通したインターンシップは募集しているものの、まだ応募がない状況。 - 大学院生の柔軟な発想・新しい発想で、我々にはない意見をいただくことを期待しているが、COVID-19もあり、学生との交流の機会があまりない。	- ぜひ筑波大生を受け入れたい。大学側から「こういう学生がいて、インターンシップに参加させたい」と相談いただければ、個別受け入れも検討する。 - 就職も念頭においたインターンシップとして考えてもらってもよい。 - インターンシップや就職を含め、博士人材にもっと来てほしい。筑波大学での広報を検討していただきたい。 - まずは授業を対面に切り替え、学生との交流を増やしていきたい。
	授業・研究指導	- これまでは達成度評価や学位論文審査会でコメントするだけだったが、徐々に一緒に実験をやったりなど、踏み込めている。 - 非常勤講師を出すことを検討したい。一方、研究指導が行える人材（協働大学院教員）については、適任者が限られており、現時点では難しい。	- 学生指導が増えてくると、リソース的にどれだけできるかが少し不安。 1単位分フルで担当するのは難しそうなので、他の機関と分担で担当する形などを検討したい。
	リカレント教育	- 日本の国力について強く危機感を覚えており、当機関の若手に筑波大で社会人ドクターを取らせたいと考えている。 - 社員の学位取得は奨励している。これまで、社員がドクターを取得したい場合は留学やペーパードクターの形が一般的だったが、協働大学院方式によって社内大学のような仕組みが作れることを知り、とても参考になった。 - 当機関では、近年はドクターを取得してから入ってくる学生が多いため、筑波大に送り込める人材があまりいないのが現状。 - 当機関では、学位としてのドクターが強く求められているとは書けないが、能力としてのドクター（独力で研究マネジメントできる人材）は求められている。	- 機関内で適任者がいないか検討したい。 - エキスパートは自機関で育てられるので、大学には+a（リスクの観点など）の幅広い視野を持った人材の育成を期待している。

国際性と学際性の日常化

Normalization of internationality and interdisciplinarity

大学院教育改革 フォーラム2023

FORUM FOR GRADUATE SCHOOL
EDUCATIONAL REFORM 2023

12月1日(金)・2日(土) つくば国際会議場

December 1-2, 2023 Tsukuba International Congress Center

「国際性と学際性の日常化」とは、すべての教室、研究室での活動が国際通用性のあるものとなり、すべての学生があらゆる組み合わせの学際的な学びを選択することを可能とすることです。本フォーラムが、異なる背景や異なる学問分野の学生同士が共に語り合い、大学の将来像を構想する場になることを願っています。

"Normalization of internationality and interdisciplinarity" means that all classroom and laboratory activities will be internationally viable and that all students will be able to choose any combination of interdisciplinary studies. We hope that this forum will serve as a platform where students from different backgrounds and academic disciplines can come together, engage in dialogue, and envision the future of universities.

1日目【2023年12月1日(金)】

PROGRAM

WEB中継 <https://us06web.zoom.us/j/87898145887>

ウェビナーID: 878 9814 5887



メインホール

13:00 - 13:30

開会の辞

加藤 光保

開会の挨拶

永田 恭介

伊藤 学司

杉野 剛

登 大遊

筑波大学 副学長(教育担当) /
大学院教育改革フォーラム2023事業委員会 委員長

筑波大学 学長

文部科学省高等教育局 文部科学戦略官

独立行政法人日本学術振興会 理事長

独立行政法人 情報処理推進機構 サイバー技術研究室長

メインホール

13:30 - 14:00

基調講演

登 大遊

名古屋大学 情報・生命医科学コンポリューションon
グローバルアライアンス卓越大学院 (CIBoG) プログラムリーダー

14:00 - 14:30

事例紹介

勝野 雅央

14:45 - 16:30

修了生
事例紹介

石川 祐

Sangjoon Lee

利根 忠幸

宮崎 慎一

ヒューマンバイオロジー学位プログラム 修了生/
横浜市立大学医学研究科臓器再生医学 助教

ヒューマンバイオロジー学位プログラム 修了生/
蔚山科学技術院 生命科学科 助教

エンパワーメント情報学プログラム 修了生/
情報通信業界企業 研究者

ヒューマニクス学位プログラム 修了生/東京大学大学院
理学系研究科生物科学専攻 睡眠生理学研究室 助教

パネルディスカッション

パネリスト

修了生事例紹介者
4名

モデレータ

久野 朗広

筑波大学 医学医療系 助教

正木 みのり

筑波大学 グローバル教育院 ヒューマニクス学位
プログラム 3年生

16:45 - 18:00

パレルセッション

中ホール

日本語のみ

WEB中継 <https://tkp-jp.zoom.us/j/83068208133>

ZoomID: 830 6820 8133

プログラム関係者向け (一般参加者もOK)

卓越大学院プログラム/
リーディングプログラム意見交換会

司会進行 鈴木 健嗣

筑波大学 システム情報系 教授/エンパワーメント情報学
学位プログラム プログラムリーダー

テーマ:【学際性の日常化】

「産学連携と協働を中核とする大学院教育の新しい
組織づくりを考える」

「従来の研究科の垣根を超えた真に学際的な新しい
組織づくりを考える」

登壇者 北海道大学 川村 洋平氏

名古屋大学 河口 信夫氏

九州大学 佐伯 修氏

筑波大学 市川創作氏 岡島 敬一氏

文部科学省



多目的ホール

WEB中継 <https://tkp-jp.zoom.us/j/84351259424>

ウェビナーID: 843 5125 9424

※ 会場内の様子・ポスター動画を中継
質問等の受付はありません

大学院生・教員・一般参加者向け

ポスターセッション

参加者

卓越大学院プログラム生
(23プログラムから55名が参加) ※予定

博士課程リーディングプログラム生
(9プログラムから15名が参加) ※予定



中会議室

グループディスカッション参加者のみ

ワークショップ (グループディスカッション)

参加者

卓越大学院プログラム生
(22プログラムから40名が参加) ※予定

18:15 - 19:30

レセプション

多目的ホール

2日目【2023年12月2日(土)】

PROGRAM

WEB中継 <https://us06web.zoom.us/j/89948793598>

ウェビナーID: 899 4879 3598



メインホール

9:00 - 11:30

ワークショップ成果発表

11:45 - 12:30

ワークショップ及びポスター審査・表彰

閉会の辞

重田 育照

筑波大学 副学長

ポスターセッション
(ポスター掲示のみ)

多目的ホール

大学院教育改革フォーラム 2023 パラレルセッション内
「卓越大学院プログラム/リーディングプログラム意見交換会」メモ

- 日時：12月1日（金） 16:45-18:00
- 場所：つくば国際会議場 2 階中ホール
- 開催形態：ハイブリット（対面および Zoom Meeting）

第一部「産学連携と協働を中核とする大学院教育の新しい組織づくりを考える」

- 講演1 筑波大学 市川 創作氏（ライフイノベーション学位プログラム）
- 講演2 筑波大学 岡島 敬一氏（リスク・レジリエンス工学学位プログラム）
- 講演3 北海道大学 川村 洋平氏（共同資源工学専攻）

<ディスカッションメモ>

Q. 企業から大学に教員を送る仕組みは理解したが、逆に大学から企業に行く仕組みはどうなっている？
（文科省・金井氏）

岡島：当方では、シンポジウムや参画企業の見学会を開催し、大学と企業での交流を常に行っている。
また、参画企業からの社会人学生が一般の学生にとっても良い影響を与えている。

Q. プログラムの制度設計までコンソーシアムと進めることが出来たら良いのでは。（文科省・金井氏）

川村：当方のケースでは、川村が商社に丸一日出張講義したりして交流を深める過程で、社会人ドクターを呼び込むなどの動きが生まれている。

プログラムの制度設計については、企業と学生が顔を突き合わせて「こんな授業があったらいい」「こんな人材が欲しい」などの意見交換を行う機会を設けており、次年度に改善できることはすぐ反映するようにしている。

市川：コンソーシアムと一体となった学位プログラムで、コンソーシアムの意見をプログラムの制度設計に反映することができるのがまさに協働大学院方式である。

→ 他大学にもこのような取り組みをどんどんアピールしていただきたい（文科省・金井氏）

Q. 企業が大学の教育に関わる際の課題とは？（筑波大・鈴木健嗣教授）

市川：大学のシステムが非常に複雑化しており、学外の先生に理解していただくのが難しい。また、民間の場合は主指導として学生をラボに受け入れるのは難しく、現実的に副指導などの形をお願いせざるを得ない。

岡島：民間企業に協働大学院教員をお願いしたいが受け入れていただくことが難しいことがある。優秀な学生の就職、社内の人材のレベルアップに繋がるなどメリットが伝えきれていないのが課題。

川村：企業には最低3年間の資金援助をお願いしていて、来年まさに更新時期。求められるのは成果。企業にとっては良い学生を獲得できることが一番だが、人気のある企業・ない企業で格差が生まれてしまい、成果が出ないと抜けられてしまう。共同研究を斡旋するなど、企業に他のメリットも感じてもらえるよう取り組んでいる。

第二部「従来の研究科の垣根を超えた真に学際的な新しい組織づくりを考える」

講演4 名古屋大学 河口 信夫氏

(卓越大学院 ライフスタイル革命のための超学際イノベーション人材養成学位プログラム)

講演5 九州大学 佐伯 修氏 (マス・フォア・イノベーション卓越大学院)

講演6 筑波大学 鈴木 健嗣氏 (エンパワーメント情報学プログラム)

<ディスカッションメモ>

Q. 多くの研究科をまたぐ教育では、教員の負荷が大きいのでは？（筑波大・鈴木健嗣教授）

佐伯：本プログラムのメインは数学の学生。他分野の先生方は、数学の学生が自分の研究室に来ることを喜んでいるようであり、互いに win-win な関係が生まれている。

委員会は既存のものをしっかり活用してマネジメントにあまり時間かからないようにしている。

河口：各研究科のスケジュールがまったく違うので、正直会議の負担は結構あるが、任期付きの特任の先生方を中心に動いていただいている。彼らは指導学生を持っていないので比較的動きやすい。

また、メディア講義を中心にしており、講義形式の授業は録画、ディスカッション授業は対面として、教員負担を減らす工夫している。

Q. 学際性も重要なのは重々承知しつつ、専門性に突き抜けた教育も必要ではないか？（参加者）

鈴木：学生が選べるようになっていくことが重要。筑波大でも専門に特化した学位プログラムから学際的な学位プログラムまであり学生本位で選択できるようになっている。

以上